

授業中のルール違反行動を規定する特性要因に関する研究

○北折 充隆 安藤 玲子
(金城学院大学人間科学部 心理学科社会心理学専攻)

【問題と目的】

学校教育の大衆化を経て、学校生活に対する指導が緩和された結果、皮肉なことに教育現場での規範の乱れが問題となってきた。大学も例外ではなく、授業を遅刻しても無反省な学生や化粧、携帯電話などに夢中になって授業を放棄している学生など枚挙にいとまがない。この中でも特に授業中の私語については不快感を覚える人も多く、注意されるべき反規範行為の第1位に私語を挙げ、教師が注意すべき行為であると同時に、学生同士でも注意すべきであると認知している。人が「迷惑だ」と感じる行為の多くはルール・マナー違反行為に該当し、重大な違法行為ではないまでも望ましくない行為であるとの認識は広く共有されている。出口・吉田(2003)によれば、対人関係の構築を重視する人は、規範意識の高低に関わらず、授業に無関係の私語を行う傾向が示されている。つまり学生は、私語が周囲の他者に対して迷惑な行為であると認識していながらも、友人関係の方をより重視し、私語をしていることになる。さらに、規範意識、社会的スキル、視点取得といった社会的に望ましい個人特性を持っている人の方が、頻繁に迷惑行為である私語をしていることも示されており(出口・吉田, 2005)、私語を初めとした授業中のルール違反行動は、特定の学生だけでなく、広く学生一般の問題といえよう。

しかし、授業を攪乱するルール違反者は、受講生全体に広く分布しているわけではない。多くのケースにおいて、数名の極端なルール違反者が引き金となり、それが全体に波及するケースがほとんどである。例えば私語なども、2, 3名が私語をして、それを教員が注意しない場合、「この授業では私語をしても構わないんだ」という記述的規範の示範となり、私語をする学生が増えていく。授業中の携帯電話、内職や無関係な携帯メールの使用、許可を得ないで退出するといったルール違反についても、少数の逸脱者が目を引き、それが波及効果をもたらした結果と考えられる。そう考えたとき、初めに私語をしたり、携帯電話をいじったりするような引き金の役割を果たすルール違反者が、どうしてそういった行為を抵抗なくするのかを明らかにしておくことは、ル

ールの遵守を促し、抑止策を考える上で興味深い。

以上をふまえ、本研究では授業中のルール違反に対して抵抗が低い群と高い群間で、どういった特性上の違いがあるのかを比較検討する。例えば授業に遅刻した場合でも、信念や特性によっては諦めて出席しないか、諦めないで出席するかを決めるまでの超過時間に差がみられることが考えられる。本研究では、こうした意識や判断で差が見られる特性要因として、まず社会のルールに対する遵守意識を投入する。またあわせて、毎日の生活を規律的に過ごすかどうかの指標として先延ばし意識についても、併せて関連を検討する。

【方法】

調査対象者 私立K大学学生168名(すべて女性)。平均年齢は20.57歳±.897であった。

調査方法 2009年11月、金城学院大学に在学中の女子学生を対象に、講義中に質問紙を一斉法により実施した。

調査項目 まず、大学に1週間のうちに何日来ているかを、1.1日から7.毎日までの7件法で尋ねた。授業入室自己許容時間として、「厳しくない先生で、出席をとらない授業(90分)を受けており、その授業に遅刻をしてしまった、何分までなら入室をするか」について記述式で尋ねた。そして、入室時間が長いほど、遅刻に罪悪感を感じていないと判断した。先延ばし傾向は、林(2007)において作成されたGeneral Procrastination Scale 日本語版(先延ばし尺度)を使用した。これは、達成する必要のある取り組みを遅延させる行動傾向のことである。尺度は「もっと前にやるはずだった物事に取り組んでいることがよくある」「期限が迫っていても、他のことに時間を費やしてしまうことがよくある」など13項目で構成される($\alpha=.87$)。従属変数として授業に対する態度を、「トイレに行きたい時はトイレに行く」「ケータイのメールやネット機能を使いたい時、その場でする」など17項目を作成した。規範意識は「敬語は大事にしたほうがよい」「親などの目上の人の意見にはしたがったほうがよい」など11項目で構成されている($\alpha=.70$)。

【結果】

遅刻を諦める時間の検討 先延ばし傾向、規範意

識を高低で二群に分け、群間で t 検定を実施したところ、先延ばし傾向の有差が見られ、これが高い群 (Mean: 40.53 分; SD: 2.53) は、低い群 (Mean: 32.96 分; SD: 2.55) と比べて有意に諦めるまでの時間が長かった ($t(156) = -2.11, p < .05$)。

特性要因との関連 授業に対する態度項目 17 項目について、先延ばし傾向高低群と規範意識高低群に分け、それぞれについて t 検定を実施した。その結果、先延ばし傾向高低群間の平均値は前 17 項目について有差が見られず、授業態度との関連は認められなかった。次に、規範意識高低群で t 検定を実施したところ 17 項目中 10 項目について有差が見られた (Table)。

【考察】

結果を見る限り、まず遅刻を諦めるまでの時間は明確に先延ばし傾向との関連が見られた。これを見る限り、もともとの個人特性は授業への受講態度を規定していることは間違いない。規範意識は授業中の態度に対しても一定の影響を持っていることが明らかとなった。この結果を見る限り、規範意識が低いと授業中にトイレに行ったり、メイクを教室の中でもする傾向がある。また、友人との私語への抵抗も低く、授業と関係のないゲームをしたり、飲み

物などを買いに行く傾向もある。さらに、つまらない授業の時に退出する傾向も顕著であり、これらは受講態度全般が望ましくない方向であり、規範意識が明確に行動を規定していると結論できよう。しかし、先延ばし傾向はすべての項目について有差が見られなかった。

総合して、授業中のルール違反には本研究で扱ったように様々な行為があるが、例えば規範意識が低いことで、すべての行為に対する抵抗が低くなったわけではなかった。例えば、授業以外のことをするにしても、授業外の課題 (いわゆる内職) をするといったことに差は見られず、ゲームやトランプをすることにのみ差が見られた。しかし、おおむね授業を攪乱するような、授業の教室内の着席位置でそのままルール違反をするような行為は、規範意識の高低が行為頻度を規定していると結論できよう。

今後の課題として、本研究で挙げたような規範意識の他、こういった行為がルール違反を助長しているのか、さらに明らかにしていく必要がある。

【引用文献】

林潤一郎 (2007). General Procrastination Scale 日本語版の作成の試み—先延ばしを測定するために— パーソナリティ研究, 15, 246-248.

Table 規範意識高低別に見た授業態度 17 項目の平均と標準偏差

	規範意識低群	規範意識高群	t
1. トイレに行きたい時はトイレに行く	4.88 (1.14)	4.49 (1.38)	1.98 *
2. ケータイで電話したい時、教室を出てする	3.94 (1.47)	3.43 (1.85)	1.93 †
3. ケータイのメールやネット機能を使いたい時、教室を出てする	2.03 (0.89)	2.21 (1.39)	-.99
4. ケータイのメールやネット機能を使いたい時、その場でする	4.72 (1.23)	4.33 (1.45)	1.85 †
5. メイク (化粧・髪の毛など) をしたい時、教室を出てする	2.55 (1.33)	2.70 (1.75)	-.62
6. メイク (化粧・髪の毛など) をしたい時、その場でする	3.23 (1.57)	2.44 (1.56)	3.19 **
7. 眠たい時、教室を出て寝る	1.57 (0.73)	1.59 (0.75)	-.13
8. 眠たい時、その場で寝る	5.09 (1.10)	4.82 (1.11)	1.56
9. 友達とおしゃべりをするために教室を出る	1.74 (0.83)	1.82 (1.07)	-.48
10. 友達とおしゃべりをしたい時はその場でする	4.44 (1.11)	3.93 (1.51)	2.47 *
11. 他の授業の課題をするために、教室を出る	2.24 (1.02)	2.22 (1.36)	.13
12. 他の授業の課題をその場でする	4.56 (0.95)	4.32 (1.33)	1.35
13. 授業と関係ないことで遊ぶ (DS、トランプなど)	3.05 (1.34)	2.50 (1.45)	2.50 *
14. 飲食物を買いに行きたい時は買いに行く	3.21 (1.41)	2.60 (1.58)	2.56 *
15. ロッカーに荷物を取りに行きたい時は取りに行く	3.71 (1.44)	3.29 (1.65)	1.68 †
16. 授業がつまらないと帰る	2.32 (1.27)	1.90 (1.13)	2.19 *
17. 用事がある時は事前に先生に伝える	4.21 (1.35)	3.45 (1.74)	3.05 **

※ () 内は標準偏差で数値が高いほど行為の頻度が高いことを示す

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$